

ここまで進化した

最新エコな 家づくり

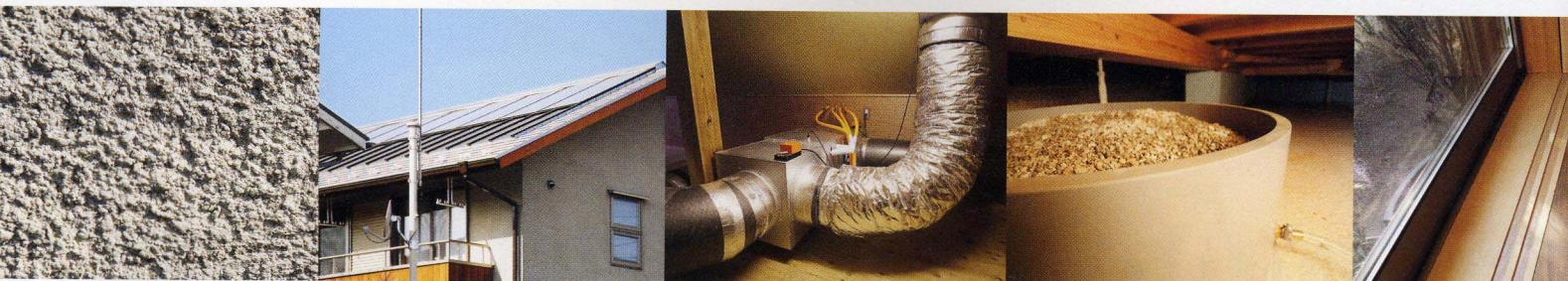
エコ最新トピックス……P.136

今年の冬は異常気象が続きました。気温が下がらない、雪が降らない、突然の台風等……温暖化に伴い地球が悲鳴を上げています。そんな温暖化に対応すべく、住宅の分野でもエコを意識した取り組みが活発になっていきます。今回はその中からエコを取り入れた住宅実例や設備メーカー等の最新ニュースを紹介。環境を守るために身近なところから取り組みたいものです。

OMソーラー 雨水利用 自然素材 太陽光発電 地下水利用 燃料



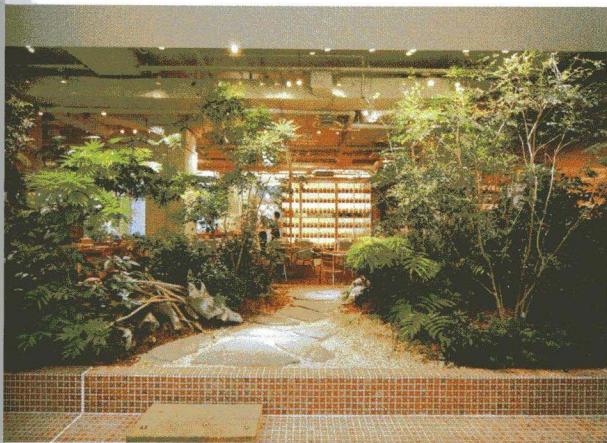
ペレットストーブ 建物の再利用 風力発電 光触媒タイル 里山ユ



大地を傷付けない基礎 屋上緑化 自給自足 廃材再利用 OMソ



6 身近なエコについて考える エコステーション



空間デザイナー鈴木恵千代氏と植栽プランナー小泉薰氏が沖縄の植物を中心に構成したみずみずしいガーデン。



ガーデンに置かれた亜臨界水処理プラントのモデル。亜臨界水[®]により、ビル内で出た生ごみを処理し、バイオガスや乳酸に再資源化。

問い合わせ先

大手町カフェ Tel 03-3211-7692 www.o-cafe.com

東京・大手町。オフィスが居並ぶ都心の、しかもビルのただ中に緑のオアシスが存在する。それが「大手町カフェ」だ。ここは、オフィスで働く人々が集う憩いの場所であると同時に、都市環境を考えるきっかけが散りばめられた情報拠点でもある。「エコを声高に宣伝するのではなく、居心地の良い空間で、環境情報を触れる。そんなエコステーション的スペースを目指しました」とこのカフェをプロデュースした三菱地所の井上成さん。

緑に満ちた店内を見渡すと、普通のカフェとは違うユニークな趣向に気付く。カウンターに使われた大理石は、以前、エレベーターホールの壁に使われていたものをリユース。テーブルや椅子には携帯電話、建物の廃材を再利用し、ランプシェードは包装ごみなどを再生した。

すべて、捨ててしまえばただのごみ。けれど、アイデアを加えるだけで見事な製品に生まれ変わる。これらはそれまでに

使われてきたモノの「記憶」を、再利用という形で未来につなげていく試みだ。「プロダクトのそばにはQRコードがついているので、携帯でアクセスすればその場で説明を見ることができます」と井上さん。新品よりも味わい深い、エコプロダクト。優れたデザインの数々を現場で確かめてみてほしい。

*亜臨界水とは、高温高压の水のこと。



1: ペットボトルや携帯電話など、さまざまなプラスチック素材を姿・形を残したままテーブルの天板に使用。2: 旧・新丸ビルの解体で出たコンクリート構成骨材を使って、再びコンクリートブロックにし、カフェ個室の床材に。3: カフェはメニューも充実。ランチタイムは近隣のオフィスワーカーで賑わう。4: 解体した建物の壁材や、建材、農場のフェンスなどの廃材を利用した「スクランプウッドチェア」。

8 断熱効果抜群の 無灌水緑化システム

暑い夏。戸建て住宅では上層階の室温が高くなり、冷房の効きが悪くなることが多い。太陽熱で屋根表面の温度は上昇、天井を通して部屋に伝わるからだ。この熱の低減に役立つのが「プランツキャスト」。屋上に断熱材の発泡セラミックスパネルを置き、多肉性植物を植えた緑化システムだ。外気温30℃、エアコン設定温度24℃の時、一般的な金属折板の倉庫屋根で未設置時は屋根表面が53・9℃、室内天井付近35・5℃に上昇するのに対し、設置時はそれぞれ37・9℃、29・7℃に抑えられるデータも。現在は工場や倉庫が中心だが、一般住宅に対応する商品を開発中だ。



上: 発泡セラミックスパネルは廃材と粘土を混ぜてスponジ状にしたリサイクルプロダクト。50×50cmのユニットを置くだけで水やり、除草の手間もなし。右: 新宿東口のオープンカフェ屋上に「プランツキャスト」を設置。

問い合わせ先

ドコー Tel 03-5283-2220 www.doko-inc.co.jp

7 庭やベランダ、リビングに 里山の植物を

都会の庭やベランダで手軽に里山の植物を楽しみたい。そんな思いから生まれた「里山ユニット」は、四角いキューブ状の1ユニットを住宅のテラス、屋外に置くだけで、里山の緑が自宅に取り入れられる。施工は一切なしの画期的システムだ。

「里山ユニット」は、金網でつくった直方体のフントンカゴに人工土壌「アクアソイル」を詰めて植物を植えたもの。上部はあぜ道の植生アザターフと在来種を中心植え、加えて側面にはツル植物などを植える。通常のコンテナでは上一面だけを緑が覆うが、この方法では計5面が緑に。1つのスペースで5倍の緑化が可能だ。システムはランドスケープデザイナーの田瀬理夫氏が開発した。

植物は在来の植生が多様に残る福島県の圃場で生産している。従来、人の手で守ってきた里山も減反や過疎化で環境悪化が著しいが、「里山ユニット」の生産はその回復と、生産地の経済活性化を目標とする。都市を緑化と同時に里山を守る新しい緑化システムだ。



右: 「里山ユニット」は20cmのキューブ(18,900円)~80cmユニット(68,250円)の8種他。左: 庭などに自主施工もできる34×48×厚さ5cmのマットに里山の植生を再現した「アゼターフ」2,500円(送料別)もある。

問い合わせ先

アネックス 5×緑事業部
Tel 03-3280-2041 <http://5baimidori.com>